

社会の変化と保健体育科の使命Ⅲ

～創作ダンス・クラス作品作りから見えること～

筑波大学附属高等学校保健体育科

征矢範子、今西智津子、貴志泉、鮫島康太、中塚義実

1. はじめに

本校で20年以上続く2学年女子ダンス発表会は、授業者が変わっても続けられ、今では本校の伝統的な行事のひとつとなっている。現在の授業者は、自身が20年前に本校でダンス発表会を経験した卒業生であり、当時は1年時3単位だったことなど細かい変化はあるものの、ダンス発表会に向けて、クラスの女子20人で創作ダンス1作品を作り上げる形は今も変わらない。これだけ長く続けてきた理由は、この「クラス作品作り」が本校の生徒たちの「クラス作り」に大きな影響を与えると実感するからである。創作ダンスは、テーマに合わせてクラスで話し合うことから始まり、動きながら修正し、1から作り上げていく行程に大きな価値がある。出来上がったダンスはクラスみんなで集まって躍り込み、完成に向けて練習を繰り返す。時に互いの意見をぶつけ合い、尊重し合って、作り上げていく様子は、新学習指導要領の求める「主体的・対話的で深い学び」であり、それは20年前から変わらない。創作ダンスの授業は、生徒たちが自ら音楽や衣装を用意し、仲間と一緒にテーマから踊りを導き出し、互いに影響を与えながら成長し、他者との良い関係を築くなど、将来を生き抜く人間性等を涵養することができる教材である。

2. ダンス発表会までの道のり

2-1. これまでのダンス授業の概要

1994年から2008年にかけて、前任の宮崎明世氏（現筑波大学体育系准教授）が作った創作ダンスの授業の流れを後任の2名の教諭が引き継いでいる。授業者はいずれもダンスが専門ではない。各自オリジナルのアレンジはあるものの、クラス作品作りという形は変わらない。宮崎氏が始めた当時は、1年生3単位から2年生に年間計画における位置づけが変わっても3単位で20時間前後の授業時数を確保できたため、前半に課題学習や民族舞踊を学習し、後半で作品作りに時間をかけることができた。民族舞踊では、沖縄修学旅行に向けて、パーランクーを用いたエイサーや、四つ竹を使った踊りを学び、グループごとに隊形の変化をアレンジして、サージという沖縄伝統衣装を身につけ、ミニ発表会で相互評価をした。後半の創作では、各クラス3グループ

に分かれて創作を進めていく。始まった当初は、観客を呼ぶのではなく、授業内でビデオを撮影し、最後の授業で全クラスの映像を見る「鑑賞会」という形で実施していた。2001年からは、放課後を利用した「ダンス発表会」にシフトし、生徒たちが司会や運営を行い、学内の観客を集めて全クラス同時に発表する形式となった。ポスターやパンフレットを作るのも、この頃から始まり、今も変わらない。発表会形式に変わったことによって、緊張感がさらに高まり、衣装や音楽へのこだわりや練習に対する熱の入れ方も変わっていった。

2-2. 現在のダンス授業の概要

現在、ダンスの授業は、高校2年生女子2単位で、後期の始まり（10月中旬）から、修学旅行を挟み冬休みに入るまで、2か月間およそ14時間程度の授業時数で実施している。前半の数時間で創作ダンスの作り方の基礎を学び、並行して創作をしていく。現代的なリズムに合わせた即興や、対極の動きなどの課題学習、仲間と一緒にお題を表現するなど、創作ダンスの基本練習や技術を学ぶ。その後、隊形の変化やアレンジを学ぶために、修学旅行の行き先に応じて、沖縄のエイサーや、シンガポールの民族舞踊を踊る年もある。ステップやターンなど個の動きの美しさを求める練習や、カノンやシンメトリーなど群の動きの工夫を、作品作りと並行して学習する。14時間の中で教師主導の授業が徐々に少なくなり、生徒の作品作りにより多くの時間を割くよう移行していく。

学習の流れ(征矢)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
0	集合・点呼 本時の説明													
5	グループごとにウォーミングアップ・ストレッチ													
10	オリエンテーション	現代的なリズムの即興	課題学習 対極の動き 走-止 伸-縮 など	エイサー 「ひやみ からふし」	エイサー グループ ワーク	エイサー 隊形の変化	ウォーミング アップ エイサー	グループ 練習 中間発表か ら修正	グループ 練習	グループ 練習	グループ 練習と全体 練習	グループ 練習と全体 練習と全体 練習	リハーサル 全体を通して 踊ってみよう	最終 リハーサル
15	体ほぐし		過去のビデオ 鑑賞	テーマ絞り込 み	グループ 練習2	グループ 練習3	グループ 練習							
20	ステップ ターン	オブジェを作 ろう	創作ダンス とは	グループ 練習1	モチーフから フレーズへ	構成を決め る	中間発表	全体練習1 他のグルー プとのつな がりを確認	全体練習2 パートのつ なごりを工 夫する	最終的なイ メージを共 有する	グループ 練習と全体 練習	リハーサル 全体を通して 踊ってみよう	最終 リハーサル	反省会 ビデオ
25			テーマ発表 ・ テーマから 思い浮かぶ こと	モチーフを出 し合う	モチーフから フレーズへ	構成を決め る								
30	集合													
35														
40														
45														
50														

教師主導

生徒の創作

図1. ダンス単元計画

2-3. クラス作品の創作過程

2-3-1. テーマの設定

毎年、漢字一文字の学年テーマを設定し、自分たちのクラスのテーマを話し合いで

導き出す。最初はブレインストーミングで思いついたことをクラスごとにホワイトボードに出す作業から始まり、徐々に絞り込んでいく。自分たちのクラスのイメージや、その時の流行、今の自分たちの身近な問題などからテーマが絞り込まれていく様子は非常に興味深い。子供たちの運動時間が減少していることが世の中の話題となり、自分たちも体力が低下していると感じて考えたテーマは「筋肉～体力の限界を感じて～」。大学受験を控えた2年生らしく、受験生を描き、最後合格したのは夢だった「第一志望は譲れない」など、これまで個性豊かなタイトルが発表されてきた(表1)。

表1. 12年間の学年テーマとクラスタイトル

2008年テーマ「今」118回生 1組 ストレス社会で戦う貴方へ 2組 Virtual Reality 3組 今ドキの高校生 4組 クリスマスクライシス 5組 筋肉～体力の限界を感じて～ 6組 Fall in Love	2014年テーマ「繋」124回生 1組 LIFE 2組 LET'S光 3組 Time 4組 トギレタ線(line) 5組 ゼロになるからだ 6組 mememto mori
2009年テーマ「響」119回生 1組 転校生を巡って クラスの可愛い女子と格好いい女子が対立…? 2組 響騒曲 だまらっしゃい!! 3組 仮面ライダー響鬼と14人の戦鬼(ショッカー)たち 4組 8時20分響くチャイム ～こうして僕らは遅刻する～ 5組 Santa's Mission クリスマスに心のベルが鳴り響くー 6組 ウィルスばにつく -迫り来るヤツらの脅威-	2015年テーマ「天」125回生 1組 memory of the sky ～天空のかけら～ 2組 Top of Our world 3組 天恋 4組 Stand up to ～天翔ける龍～ 5組 天下統一 ～大和魂～ 6組 the world of black and white
2010年テーマ「輝」120回生 1組 はみがき戦隊ピカ☆レンジャー～迫りくる黒い影～ 2組 あしたてんきにな～れ♪ 3組 バブル～輝いた人生をもう一度～ 4組 水平線上の闘争 (strife) ～輝く宝を手に入れる!～ 5組 それゆけ輝けクリスマス 6組 黒 輝	2016年テーマ「時」126回生 1組 襲命 2組 Waiting for you… 3組 ガチャン。 4組 again ～会って別れてまた会って～ 5組 夢現の狭間 6組 休校かよ!
2011年テーマ「優」121回生 1組 マリア姐さんのクリームシチュー 2組 戦え!善玉レンジャー ～優しさは強さ～ 3組 You'll find 優 ～心の旅へ。 4組 Carnation ～母娘の愛～ 5組 クリスマスの危機 6組 it's a small world	2017年テーマ「望」127回生 1組 思春期ヒーロー 2組 栄枯盛衰 3組 望検の旅 4組 第一志望は譲れない 5組 春望 6組 宇宙人—I'm a space human—
2012年テーマ「光」122回生 1組 ゆき to はる ～わたしが芽生える季節～ 2組 脱獄 光を求めて 3組 光の救済 4組 憧れ 5組 RINNE ーお腹の中からこんにちは(^-^)- 6組 Get the Treasures	2018年テーマ「破」128回生 1組 ラブラブアラブ～恋のオイルショック～ 2組 La revolution 3組 アナザースカイ 4組 よこそわが組へ 5組 リピート 6組 ゾンビに負けるな!!
2013年テーマ「希」123回生 1組 Hope～女の子は誰でも～ 2組 宇宙(そら)に願いを 3組 希望の地球(ほし) 4組 激戦～メの布を巡って～ 5組 Snow White～謎のプリンセス～ 6組 夢見てる夢	2019年テーマ「輪」129回生 1組 Dear プラトン 2組 僕はちくわの中身を覗いてしまった 3組 Tale of the Ring 4組 夢をつかめ 5組 サークルオブライフ 6組 水の輪

2-3-2. 作品作りの実際

1 クラスあたり 6~7 分の作品とし、クラスの女子 20 人を 3 グループ（はじめ・なか・おわり）に分け、1 グループあたり 2~3 分程度の作品を作り、つなぎ合わせる。

「はじめ」グループが作ったダンスを、グループのメンバーだけで踊っても良いし、人数を増やしても良い。自分たちのテーマに沿って、展開を考えるため、はじめに全員が出てきてインパクトを与えるクラスもあれば、おわりに全員で一斉にユニゾンで踊り、盛り上がり終わるクラスも出てくる。グループの中には音楽、衣装、広報などの担当者を作り、音楽は原則歌詞のない曲でテーマに沿ったものを自分たちで選曲して使用する。編集等もすべて自分たちで行う。クラステーマが決まったら、それぞれ展開を考え、3つのグループに分かれてモチーフを出し合う。最初はイメージする動きを即興で出し合い、モチーフがたくさん出てきたら、それをつなぎ合わせ、フレーズにし、テーマから出し合った音楽に合わせて作品としていく。これらの作品作りと並行して、教師主体で創作ダンスのヒントとなる基本の動きを学ぶのだが、発表会という「観客に見られる環境」を作ることで、動きの美しさや表情、仲間と揃える難しさなど、繰り返し練習することによる技術の向上も体感させたい。

12月に体育館の小アリーナをステージとして、全6クラスで発表会を行う。観客は先生方や先輩・後輩、男子生徒など学内だけとし、学外からの招待はない。200人以上の観客の前での発表のため、生徒の緊張感は非常に大きい。日常では2クラス合同で授業が行われるため、女子生徒たちは他の4クラスの作品はこの時に初めて見ることができる。賞などは設けていない。賞を取ることを目標としなくても、時間とともに自分たちの作品に愛着を持って、クラス全員で1つの作品を作り上げていくことを目指させたい。

表2. クラス作品作り 発表会までの授業予定

回	授業内容	1・2組	3・4組	5・6組
1	テーマ発表 テーマから思いつくことを話し合う	10月24日	10月25日	10月24日
2	テーマから思いつくことを話し合う		10月28日	10月28日
3	グループ練習1・・・テーマ・タイトル決定、モチーフを考えよう	10月27日	11月1日	10月31日
4	グループ練習2・・・モチーフを変化させてフレーズへ	10月31日	11月4日	11月4日
5	グループ練習3・・・空間や群を工夫して構成を決めよう	11月7日	11月8日	11月7日
6	中間発表(パート作品の完成)	11月10日	11月11日	11月11日
7	全体練習1・・・パート作品を全体作品につなげる	11月14日	11月15日	11月14日
8	全体練習2・・・パートのつながりを工夫する	11月17日	11月18日	11月18日
9	全体練習3・・・通して踊りこむ		11月29日	
10	通して踊りこむ	12月1日	12月2日	12月2日
11	リハーサル・・・全体を通す	12月5日	12月6日	12月5日
12	最終リハーサル・・・当日の衣装を着けて踊る	12月8日	12月9日	12月9日
	発表会	12/10(土)11:30仮		
	反省会(ビデオ視聴)	12月12日	12月13日	12月12日

※ 2016年度の例。1回目の授業はオリエンテーションと体ほぐし。2回目は即興。全15時間。

3. 創作過程における生徒同士や教師の関わり

3-1. 生徒同士の関わり

苦手な生徒がどこまで参加するか、鍵を握るのがダンス部の存在である。本校には、創作ダンスからチアまで幅広く活動しているダンス部がある。各クラスにダンス部がいるわけではなく、ダンス経験者が一人もいないクラスもある。創作に入ると、最初に即興等で各個人のイメージをモチーフとして出し合うのだが、自分の踊りに自信がなく、恥ずかしがってモチーフを出せない生徒も出てくる。モチーフづくりをすべてダンス部へ頼ってしまうクラスもある。単純に踊りのレパートリーが少ないために、うまく表現できない生徒もいる。そこで、ヒントを与えながら、オリジナルの踊りを引き出す存在として、ダンス部に活躍してほしい。生徒は「自分のフレーズが採用されると嬉しい」といった感想も多く、自分の作った作品という愛着が深くなる。ダンス部のいるクラスは、表現方法が豊かなため、まとまりある世界観を出すことができるが、一部の生徒の力が大きく影響した作品になりやすい。一方、ダンス部がないクラスは「自分たちでどうにかしなくては」という意識が働くこともあり、積極的に関わり合い、意見を出し合うことも多い。出来上がった作品は、個性的で驚くようなアイデアが出ることがある。

ダンス作りを始めてしばらくすると、クラスで意見が対立したり、食い違うケースもある。音楽編集がせっかく夜中までかかって作業をしたのに、さらに変更があり、担当者が大きな不満を持つケースや、当初の話し合いが曖昧だったために、グループごとの踊りがイメージと異なる方向で進み、各グループの作ったダンスを、いざ中間発表で見ると、大きくずれているケースもあった。このように問題が起きた時、それを解決する努力をすることによって、クラスの繋がりが強くなることがよくある。SNSなど画面を通じてのやり取りではなく、踊っているその現場で話し合い、コミュニケーションを要求されるクラス作品作りは、課題解決能力を育む教材と言える。クラスの仲が良くなったり悪くなったり、上手くいくことばかりではないが、その中で生徒が大きく成長していく様子が伺え、この行事を楽しみにしている担任教諭も多い。

毎年ダンス発表会が終わった生徒に、後輩へのアドバイスを書かせ、次の年に後輩へ配布している。その内容を以下に示した（図2）。話し合いの中で自分の意見が否定されたり、問題を一人で抱え込みすぎてうまく回らなくなったり、彼女たちのうまくいかなかった経験から、後輩たちに同じ思いをさせないように、アドバイスが生まれていることがわかる。本校のダンス発表会を経て、どのような思いに至ったか、どのような苦労があったのかが、よく表れている。

図2. 「後輩へのアドバイス」抜粋

- 時間は少ないし、全員で集まれる時間ももっと少ないはずですが、でもできます！
- テーマを決める時が一番大事だと思う。ある一つの大きなテーマをみんながしっかり理解し、共通認識を持てば、全体の作品も自然とまとまる。
- 思いっきり笑顔で！堂々としていない方が逆に目立ちます。簡単な動きでもそろっているときれいに見える。
- 自分の意見を言うのは、否定されるのではないかと怖くなって言いづらくなってしまおうと思うけど、思ったことやアイディアは絶対言うべき！後悔すると思うよ。ダンス部だからといって自分で全部決めることは決してなく、みんなの意見をととても優先してくれたから。
- みんながみんな、振りを提案するばかりじゃ進まない。提案されたものからより良いものを発想したり、隊形を考えていくという役割の人も必要だと思う。
- テーマとダンスをパッと決めて、踊り込みの時間をたくさん取った方が、完成度は高く見えると思います。特にコミュニケーションはしっかりと！
- パートリーダーは負担が多いと思うので、一人で抱えずにみんなに協力を求めて良いと思います。逆に、他の係の人はリーダーにすべてを任せたりせずに、しっかりと協力してあげるとよいと思いました。
- よりキレイに見せるためには、早めに振り付けを終わらせて、踊り込みの時間をいっぱい取ること。振り付けを速く終わらせるためには、一人一人が意見をバンバン出さなくてはいけないので、思いついたことは、恥ずかしがらずに言う！朝練、昼練などを積み重ねて、ひたすら揃えることを意識すると良いです。練習した分だけ本番が楽しいし、達成感のはんばないし、感動するので積極的にたくさん練習を積んで良い作品にしてください。
- 暗い雰囲気だとやっぱりダンスは生まれません。とりあえず楽しく、笑いながらみんなが好き勝手動いてみる。そして、それを組み合わせれば、十分ダンスになります！
- グループを分けるにしても、各グループがどんなことを表現するのか、全体でイメージを共有するのが大切です。ぶつかり合うこともあると思うけど、頑張ってください。
- 各パートとの話し合いを絶対すること！それぞれが思い描いているイメージが違ったりして、つながりが合わなくなる。曲は拍をとりやすいものの方が考える際も踊る際もやりやすい。
- ともかく踊って、思ったことは口に出す。周りの人は「え、それおかしい」と言う前に一度やってみる！
- パート全員で振り付け考えよーなどと言っていると、結局何も出なくて進まない。それよりは、誰か一人が（まず自分！）通して、隊形も振りも何もかも考えてきて、それを変化させていった方が、質の良いものを作れると思う。

3-2. 教師の関わり方

この単元の担当教諭は3人ともダンスが専門ではない。ダンスの授業で、教員が恥ずかしがっていると、生徒も恥ずかしくなって委縮したり、動きが硬くなる。生徒が思い切って体を動かす雰囲気を作るためには、教師も全力で、笑顔で取り組むことが大切、というのが3人の共通認識だった。著者の担当したある学年の生徒で、中学時代からダンスの授業が苦手で、最初の授業で泣き出した生徒がいた。ダンスの授業で、何かになりきって踊ることや、楽しくないのに笑顔を作って踊ることを、バカらしいと

感じてしまい、どうしても許せないのだという。これまでに、同じような思いを抱えていた生徒もいたと思う。しかし、授業の当初どこまで力を出してよいのかわからなくて様子を見ていたり、恥ずかしい、苦手と感じている生徒も、仲間と一緒に体を動かすことが、徐々に楽しくなっていき、簡単なダンスの完成を喜んだり、技術が向上し、友達と踊りを揃えることができるようになったり、と達成感を得ることで恥ずかしさから抜け出すことができた。泣き出した生徒は、残念ながら発表会当日は欠席したが、彼女の中で創作の授業の意味を割り切り、練習には仲間と一緒に参加した。教員は、苦手意識を持つ生徒に対し、無理やり参加を促すのではなく、少しずつ出来ることを増やしていきながら、決して否定せず「正解はないよ、それでいいんだよ」というメッセージを出し続けていきたいと考え、指導に当たっている。

4. 研究大会当日の分科会議論から

12月7日の研究大会では、午前中に2年女子ダンス単元を授業公開し、発表会前のリハーサルの様子を参観いただいた。午後は、分科会で公開授業の質疑や、各校のダンス授業の実態について、参加者の皆さんと議論ができたので、以下にまとめる。

4-1. 公開授業について

参加者からの質問に対する授業者の回答を中心にまとめた。

- ☆ 創作ダンスの授業で、多様な動きを生徒から引き出すために、すべてを教えるのではなく、1から10に変化させていく視点を与えるように意識している。最近インターネットの動画から動きを模倣することも多いが、パクリはダメだけど、アレンジはOKと伝えている。創作ダンスでアレンジの楽しさを学ばせたい。動きたくなる動作と逆の動きをやることもある。
- ☆ ダンス単元の評価はとても難しい。技能のみならず作品作りへの参加の姿勢や、どのように試行錯誤していくかを観察している。新学習指導要領の三つの柱を意識して、ルーブリック的に毎時間細かく評価している。各班に1冊ノートがあり、交代で記録させているため、1人が2回程度担当する。これとは別に、単元の最後にワークシートを提出させ、評価の材料としている。発表会を評価の対象にはしていない。
- ☆ 本校ではスマホの使用について制限をしていない。生徒は授業内にスマホで

踊りを撮影したり、音楽を再生したりするが、授業内の目的に沿った効果的な使用であれば許可している。

- ◇ グループでの話し合いの過程として、授業当初は出しっぱなしだったアイデアが、後半になるとまとまっていく様子が見えてくる。内容がより具体的になり、体を動かしながら話し合いを進めるようになる。ダンス部の生徒だけで作り上げてしまうとうまくいかない。ダンス部員には、周りの意見を吸い上げることの大切さなど、個別に指導することもある。



4-2.各校のダンス単元の実態

- ◇ 単元に10時間程度しか取れず、限られた時間の中で創作ダンスをやっているため、音源も教員が用意している。
- ◇ 中学2年生のダンスで、現代的なリズムのダンスを行っている。決まったリズムの動きを覚えて踊る。
- ◇ 創作ダンスに積極的だった以前の学校では、選択制で18時間を3年間行っていた。単元の3分の1の時間を創作ダンスに充て、10人くらいで3分以内の創作ダンスを作っていた。
- ◇ 男子に踊らせると圧倒的に面白くなる。男子が創作ダンスをやると幅が広がるので、男女共習の良さが出る。

5. ダンスの授業における社会の変化と保健体育科の使命

5-1. 生徒を取り巻く状況の変化

5-1-1.男女共習の創作ダンス

研究大会の分科会で、男女共習についての話題が出た。男子が創作ダンスをすると、発想が豊かで幅が広がり面白いという。現在本校では、ダンスは女子だけの単元であり、男子がダンスをするためには、3年次の選択授業で、自主的に企画をするしか方法はない。本校におけるこれまでの男子生徒とダンスとの関わりの変遷と、今後の可能性について、保健体育科で議論した。

1980年代、体育の授業は男子が週4時間、女子が週2時間という時代があった。その当時からダンスの授業はあったが、「女子だけのもの」である。社会的に男子が人前

で踊る文化は今ほどなく、本校でも、ダンス部のチアリーディングや現代的なリズムのダンスは、男子にとっては「見に行くことでさえ恥ずかしい」と感じるほど敷居が高かった。1990年代に入り、テレビで国内や海外の男性歌手がカッコよく踊る様子が多くみられるようになるなど、社会的にも男性が人前で踊ることに抵抗を感じなくなり、ダンスに対する価値観が大きく変化していった。2000年代に入ると、本校でも3年選択体育の講座（本校では生徒たちが未履修種目の中から企画を立てる）に「HipHop」ができ、男子生徒も含んだグループが自発的に校内で発表会を行うなど、ダンスは「女子だけのもの」ではなくなっていた。もちろん、昔も今も人前で踊ることに恥ずかしさや抵抗を感じる生徒もいるが、社会的にみても、男子が踊ることに違和感がある時代ではなくなった。その後、2008年から中学ではダンスが必修化となり、ダンスは男女問わず定着していく。授業で扱う内容は「創作ダンス」「フォークダンス」「現代的なリズムのダンス」の3つで構成されている。「現代的なリズムのダンス」はテレビで見るカッコよく踊るダンスを真似したり、簡単な動きをテンポの速い動きで踊るため生徒たちからの人気は高い。踊ってみたいと思う生徒も多いが、リズムが速く、難しいと感じる生徒も多い。「フォークダンス」は、小学生の頃から運動会や宿泊行事のキャンプファイヤーなどで踊ることから、男子にとっても馴染み深いダンスである。では、「創作ダンス」はどうか。中学校で創作ダンスを踊る学校は少なくない。テーマに合わせて体を動かして表現するため、「これが正解」というものはなく、工夫次第でカッコよく踊ることもできる。実際に本校の中学のダンスの授業では1年次に男子も必修で学習し、テーマの捉え方や動きのアレンジを学びながら、自分たちでダンスを作る創作ダンスの授業を行っている。

学習指導要領が変わり、中学時代に創作ダンスを経験している生徒が増えたことで、ダンスに対するハードルが大きく下がり、今後は高校でも男女共習の方策を検討していく必要があると感じた。

5-1-2.スマホの活用とダンス

本校ではスマホの使用を制限していない。学校内でも、節度を守れば自由にスマホを使うことができる。スマホが原因のトラブルは起きるが、それでも禁止するより正しい使い方を身につけさせることを重視しているからだ。スマホの出現によって、急速に高校生の生活が変化していることは、多くの大人が危惧しているところである。生徒の活動を観察していると、至る所で「LINEで送っておくね」で済ませることが多く、毎日学校で顔を合わせているにも関わらず、委員会活動や部活動でも連絡事項が伝わらない場合に「LINEを見ていない方が悪い」という始末である。

今回の公開授業の中でも、生徒は自由にスマホを使用していた。もちろん、ダンスの授業で必要と認められる場合のみであるが、生徒たちにとってはスマホがあることが

当たり前となり、授業のための便利なツールの一つとして活用している。スマホの利用は、主に、音楽の再生と、動画の撮影である。班ごとに練習する際、各自が持参したスマホをスピーカーに接続して曲を再生している。その場で検索して、自分たちの考えたテーマやモチーフにあった曲を探すこともできる。創作ダンスに使う音源は基本的に歌詞のないものを使用することになっているが、曲によってはアプリで歌詞を抜く加工もできるなど、10年前に比べ曲の編集技術は格段に進歩している。

発表会が近くなると、2年女子は学校にいる間、朝練や昼練などダンスにどっぷり漬かるのだが、スマホの普及によって、自宅にいる時間もダンス漬けになっているという。例えば、ユニゾンの部分をダンス部が作り、その振り付けを動画にしてクラスLINEで送り、「明日までにこの振り付けを覚えてきて」というものである。研究大会の分科会でも、各校の実践の中で、このスマホの「宿題」が話題となったので、本校だけに限ったことではないようだ。発表会まで時間が迫っているにも関わらずなかなか完成に至らない場合、宿題で対応しようとするのだが、覚えてこないと「LINEで送ったのに（練習してこなかった）」というトラブルになりがちである。ダンスに自信のない生徒は、みんなに迷惑を掛けたくない、必死になって自宅で予習をする。しかし、動画のダンスを自分だけで再現するのは非常に難しい。動画はイメージを持つために効果的な場合もあるが、一人で動画を見ただけではうまく踊れるようにはならない。誰かと一緒に、互いの間違いを指摘し合いながら、踊り込んでようやく完成していく。3か月のダンス単元の間、動画で「宿題」を出すだけで簡単には踊れるようにならないことを、生徒は学んでいく。仲間と一緒に作り上げるからこそ、終わった時の達成感と満足感が大きく、生徒の中に残る作品になるのだろう。

5-2.保健体育科の使命

卒業生に会うと、ダンス単元を非常によく覚えていることが多い。数年たった後でも曲を聞けば体が動くという。それだけ、時間と手間をかけて自分たちの作品を作ってきた証拠だろう。これまで数千人の卒業生が、クラスで1つのものを作り上げる苦労と喜びを経験してきた。他者と積極的に関わらないと出来上がらない創作ダンスの授業は、昔から続く単元であるものの、むしろ今の時代に相応しい学習教材だと言える。3年生の最後の単元のワークシートで、「小中高12年間の体育授業の意義」を問う質問にこのような回答があった。「技量の違う人が同じ枠組み（授業）で運動することで、自分の好きなことだけをやる時とは異なる代えがたい経験ができた」「スポーツを通しての仲間との交流や、他の人と協力してゲームをするなどコミュニケーションを学べた」。このことからわかるように、体育とは、一人一人能力や性質が異なる個人と、自分がどう関わるべきかを考え、失敗や成功を経験しながら、社会性を養い、成長していくことができる教科である。創作ダンスの授業を経て、互いの意見を尊重し、仲

間と助け合い、コミュニケーションの大切さを学んだことが、その後のクラス作りに大きな影響を与えたことは言うまでもない。

ダンスの授業で時間をかけて、仲間と苦勞をして得た経験や学びが、社会に出た時に壁を乗り越える力になってくれると信じている。忙しさや時間の無さを理由に、効率の良さを求めがちだが、授業づくりの際、そこに満足感や達成感、自信などの数字で表すことのできない成果があることを忘れてはいけない。これからも、生徒が自ら成長を感じ、クラスが成熟する一助となるような、授業づくりをしていきたい。